
魔法少女リリカルなのは ~ 蒼天の剣 ~

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～蒼天の剣～

【Nコード】

N0541Z

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

海鳴市に住む青年が、六課に入ったとき、運命の歯車が動き出す。その先に待つの破滅か？それとも平和か？さあ、その手で未来を切り開け！！

第1話 『蒼い閃光』

「よし、今日の訓練は此処まで。各自、ストレッチをしてから帰るよつに」

「ありがとうございます」

ある道場で、一人の青年が子供たちに武術を教えていた

「先生、さようなら」

「兄ちゃん、またね」

「気を付けて帰れよ」

彼の名は火群魁。火群道場の師範代である

「魁、稽古終わったの？」

家の玄関を開けると、おしゃれな格好をした女性がいた

魁：「まあね。それより、姉ちゃんどっかに行くの？」

彼女の名は火群茜、魁の姉であり、同じく道場の師範代（弓）でもある

茜：「ええ。これから、美由希と一緒に買い物に行くの」

魁：「美由希さんと？帰ってきてたんだ」

茜：「多分、夕飯は外で食べると思うから、私の分は作らなくていいから」

魁：「あいよ。もし、家で食べるなら連絡してくれ」

茜：「ええ。じゃあ、行ってきまーす」

茜は玄関を出て行った

「お疲れ様です、マスター」

魁がリビングに入ると、銀髪の女性が魁に話しかけた

「どつぞ」

魁：「サンキュー、リイン」

彼女の名は、リインフォース。かつての『夜天の書』の管制人格10年前に消えたが、別次元にあった書、『天空の書』の管制人格になった。それを魁が4年前に発見し、魁がマスターとなった

魁：「所でリオはどこだ？」

リイン：「リオ様なら、外でお昼寝をしています」

魁：「ったく、稽古が終わったら、『武術を教える』って言うってたくせに」

魁は笑った

魁：「それより、悪いなリイン。本来なら、お前の全主、八神に合わせてやってるところなんだが」

リイン：「大丈夫です、マスターが忙しいのは理解していますから」

魁：「つたく、囑託魔道士の俺に何でたくさん依頼してくるかね」

リイン：「それだけ、マスターが優秀だと言うことでは無いですか？」

魁：「俺はそこまで、優秀じゃないんだけどな」

魁がそう言つと

『マスター』

魁が着けているネックレスが魁に話しかけた

魁：「どうした、エクシア？」

E：『山奥からロストロギアの反応を感知！どうしますか？』

魁：「行くに決まってるだろう」

リイン：「マスター、私も一緒に行きましようか？」

魁：「いや、いい。リオが起きるかもしれないから。一緒に留守番していてくれ」

リン：「解りました」

そう言い。魁は山奥に向かった

～山奥～

「はあ、はあ・・・」

ロストロギアの反応がある地点で一人の少女が戦っている

「まさか、レリックを取り込むなんて」

彼女の名前はフェイト・T・ハラウン。管理局の執務管だ。彼女はある違法魔道士がロストロギアを持ち逃げしたと聞き、追っていた。犯人に追いつき、戦闘不能にまで追い詰めたのだが、犯人がロストロギア『レリック』を使い、怪物となってしまうのだ

「がああああああ」

疲れていたのか、怪物となった魔道士の攻撃に反応できず、直撃を受け、吹き飛ばされてしまった

フェイト：「ぐうっ!!」

フェイトは木に激突した。怪物はそのまま、フェイトの追撃を仕掛けようとした

フェイト：「（か、体が動かない）」

さっきの衝撃がまだ残っており、フェイトは動けなかった

フェイト：「（皆、ごめん）」

怪物の攻撃が当たろうとした瞬間、

『Sonic move』

蒼い閃光がフェイトを助けた

魁：「間一髪だな」

閃光の正体は魁であった

魁：「大丈夫か？つて、ハラオウンじゃねえか」

フェイト：「ほ、むら君？」

魁はフェイトを地面に降ろし、怪我の様子を見た

魁：「（怪我はそこまでひどくねえな、これなら少し休ませれば回復するだろう）」

魁は立ち上がった

フェイト：「ほ、むら君、逃げて。此処に、いたら、危険だよ」

魁：「怪我している女の子を見捨ててまで逃げようとは思はねえよ」

魁はそう言い、エクシアに話しかけた

魁：「準備はいいか、エクシア？」

E：『勿論です、マスター』

魁：「そんじゃあ、行くぜ。セットアップ!!」

エクシアは待機状態から、銃、剣、盾が一体となった剣『GNソード』になり、魁もBJを纏った

魁：「火群魁、目標を駆逐する!!」

魁はGNソードをソードモードにし、怪物に突撃した

「がああああ」

怪物は魁に攻撃してきたが、魁はそれをかがんで避け、そのまま回転しながら敵を斬り裂いた

「があっ!?!」

魁：「はあっ!?!」

そして、ひるんでいる怪物に蹴りを放ち、蹴り飛ばした

魁：「……………案外、あつけないな」

魁はそうはいつているが、剣を構えていた

「ぐあああああ」

怪物は何事もなかったのように立ち上がった

魁：「タフな奴だな。うん? なっ!?!」

魁は怪物の身体を見て、驚いた。何故なら、先程傷をつけた個所が治っているからである

魁：「どういうことだ?」

E：『恐らく、ロストらギアを体内に取り込んだことにより、驚異的な回復能力を得たようですね』

解らなかつた魁にエクシアが教えた

魁：「エクシア、現段階であいつを倒す方法は?」

E：『封印するしかありませんね。しかし、問題はどつやって相手の動きを止めるかです』

魁：「俺に考えがある。封印の準備をしておいてくれ」

E：『了解』

魁はエクシアに封印の準備を頼むと、怪物に近づき、左掌底を喰らわせ、直ぐに距離を取った

「ぐああああ！！があっ！？」

怪物が魁に近づこうとした瞬間、雷を纏った蒼いバインドが怪物に巻きついた

魁：「ライトニングバインド。さっき、掌底を打ち込んだ時に仕掛けさせてもらった」

E：『ライフモード！』

GNソードの刀身が折りたたまれ、魁は銃口を怪物に向けた

E：『マスター、封印砲の準備完了です』

魁：「そんじゃあ、行くぜ」

魁は銃口に魔力球を形成した

E：『ターゲットロック』

魁：「ライジング・・・スマッシャー！...」

雷を纏った蒼い閃光が怪物を包み込んだ。閃光が止むと、そこには、赤い宝石と違法魔道士が倒れていた

魁：「ふう、完了つと。さて、ハラオウンは、って寝ちゃってるよ」

魁がフェイトの方に振り向くと、眠っていた

魁：「……怪我の治療もしないと行けないし、取りあえず家に連れて行くか」

魁は違法魔道士に嚴重なバインドを掛けた後、赤い宝石をエクスアに入れ、フェイトを抱えて家に向かった

設定

主人公

名前 火群 魁 (ほむら かい)

年齢 19歳

性別 男

容姿 BLACK CATのトレイン・ハートネット(瞳の色は黒)

魔力量 S+

魔力光 蒼

所持ランク 総合S+

変換資質 電気

海鳴市に住む青年。火群流道場の師範代で空手を教えている。空手の実力は達人レベル(史上最強の弟子兼一の逆鬼並)。中学の時3回、高校3回、計6回全国で優勝している。小学3年から中学の卒業までなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかとは同級生だった。本人は気づいていないが、中学、高校のときはかなり女子に人気があり、ファンクラブがあった模様。家族全員が魔道士であり、

両親はデバイスマスターとして本局で働いている

デバイス

名前 エクシア インテリジェンドデバイス（AIは女性）

待機状態 ネットクレス

特殊装備 MNドライブ（内容はGNドライブと同じ）
ツインドライブシステム 現在封印中

特殊機能 トランザムシステム 2分間の間、魔道士の力をSS
S並にする。一度使用すると、チャージまで3分間かかる。尚、チ
ヤージに必要な魔力は使用者の物ではなく、大気中にある魔力の粒
子である

起動状態

モード1 エクシアの基本形態。剣、銃、盾を一体化したもので、
扱いがよく魁が一番使っている形態。形状はGNソード

モード2 エクシアの双剣形態。形状はGNソード？

モード3 エクシアのインファイト形態。形状は手甲（ケンイチ
が使っているもの）

モード4 エクシアの砲撃形態。形状はGNソード？ブラスター

モード5 エクシアの大剣形態。形状はGNバスターソード？

モード6 エクシアの七剣形態。剣の形状はダブルオーガンダム
セブンスード/G

。BJ ゴッドイーターのF制式上衣と下衣（ジャケットの色は蒼）
。更に両腰にはガンダムエクシアリペア？で装備されているGNビ
ームサーベル

名前 リインフォース？

容姿は A、sの時と同じ

主 火群 魁

元夜天の書の管制人格。消えたはずだが、他の次元にあった魔道書『天空の魔道書』の管制人格になった。4年前に魁に見つけられ、そのまま契約した。実力はA、sの時の倍で、火群道場で特訓しており格闘スキルに磨きがかかった

第2話 『勧誘』

フェイト：「ううん。ここは？」

起き上がったフェイトは辺りを見回した

魁：「ようやくお目覚めか。随分長いこと寝てたもんだぜ」

そこには椅子に座って本を読んでいる魁がいた

フェイト：「火群君？ここは？」

魁：「俺の家だ。あの後、お前はそのまま寝ちまったのさ。覚えてねえのか？」

魁がそう言つと

フェイト：「っ！そうだ、レリックは！？あの違法魔道士は！？」

魁に言われ、フェイトはようやく思い出した

魁：「お前がおっていた違法魔道士なら、俺が倒して、ここに
来た局員さつき引き渡した。レリックって奴なら、ほれ」

そう言い、魁はレリックの入ったケースをフェイトに投げた

フェイト：「ぎゃ」

フェイトは慌ててそれをキャッチした

魁：「封印はすでにしてるから安心しろ」

フェイト：「あ、ありがとう。・・・所で、何で私は着物を着てるの？」

フェイトは自分の服装を見て行った

魁：「あの服装のままだと、寝づらいつてあいつが言っただけで・・・言つとくが、服を着せたのは俺じゃないからな。それと、包帯を変えたいから、腕を出してくれないか？」

フェイト：「う、うん」

フェイトは魁の言われたとおりにした

魁：「くくく」

魁は口笛を吹きながら包帯を変えている。一方、フェイトはと言
うと

フェイト：「・・・／＼」

魁の顔が近くにある為、顔が真っ赤である。何を隠そうフェイトは魁の事が好きである。中学の時、一部の女子からいじめを受けていたところを魁が助けてくれたのだ。その姿と魁の笑顔にフェイトは魅かれた

魁：「うし、これで良しっと。うん？顔が赤いが大丈夫か？」

フェイト：「だ、大丈夫だよ／＼」

その時

リオ：「お父さ〜ん」

リオがふすまを開けて、魁に突っ込んできた

魁：「こら、リオ。お客さんがいるんだぞ。それと、他に人がいる前では『お兄ちゃんって言えと言ってるだろう』」

リオ：「だって、お父さんはお父さんだもん」

魁：「はあ〜」

リオの言葉に魁はため息をついた

フェイト：「ほ、火群君、その子もしかして、火群君の娘さん？」

魁：「まあな。養子だけだな」

フェイト：「っえ？」

魁の言葉を聞いてフェイトは首を傾げた

魁：「ちよつと、事情があつてな」

フェイト：「そ、そうなんだ（よ、良かった）」

フェイトは心の中で安心した。そして

リン：「失礼します、マスター。彼女は起き上がりましたか？」

リンが部屋に入ってきた

フェイト：「リ、リンフォース！？な、なんで」

リン：「久しぶりですね、小さき勇者よ」

フェイトはリンの存在に驚き、リンはフェイトに再開の挨拶をした

フェイト：「ど、どうして、だって、あの時」

魁：「それは、俺が説明する」

魁はリンについて、説明した。（文は設定と同じ）

魁：「っと、いう訳だ」

フェイト：「そ、そうなんだ。このこと、はやては」

魁：「知らねえよ。八神に会わせてやりたいんだけどな。高校とかで忙しくてな」

リオ：「お父さん、お腹すいた」

魁：「そう言えば、もう7時だしな。直ぐに、用意するから待ってな」

リオ：「うん」

フェイト：「じゃ、じゃあ、私もそろそろ」

魁：「まだ、ダメージは残ってるんだ、食っていけ」

フェイト：「でも」

魁：「3人分作るのと、4人分作るのも同じようなもんだ」

フェイト：「・・・じゃあ、お言葉に甘えて」

魁：「リオ、作っている間に風呂に入ってこい」

リオ：「はい。お姉ちゃんも一緒に入ろう」

リオはフェイトにそう言った

フェイト：「いいの？」

リオ：「一人で入るより、二人で入った方が楽しいもん」

リオは笑顔でそう言った

フェイト：「じゃあ、一緒に入ろうか」

リオ：「うん」

そう言い、フェイトとリオは浴室に向かった

魁：「リイン、ハラオウンとリオの服を用意しておいてくれ」

リイン：「はい」

魁はそう言い、厨房に向かった

フェイトとリオが風呂から上がった後、食事を取り、4人は色々なことを話した。途中、リオが魁とフェイトの事を夫婦みたいだと言い、魁は飲んでいたお茶を吹き、フェイトは顔を真っ赤にした

そして、食事が終わってから、暫くしてチャイムが鳴った

魁：「お迎えがきたみたいだな」

そう言い、魁は玄関に向かった。数分後、魁はリンディを連れて居間に戻ってきた

フェイト：「母さん」

リンディ：「大丈夫だった、フェイト。魁君から連絡があった時は驚いたわ」

リンディはフェイトの状態を見て安心した

リンディ：「ありがとう、魁君。フェイトを助けてくれて。それと、リインちゃんも久しぶりね」

魁：「いえ、いえ」

リン：「お久しぶりです、リンディさん」

フェイト：「母さんはリンフォースの事知ってたの!？」

リンディ：「ええ。魁君から聞かせてもらってたわ」

フェイト：「教えてくれても良かったのに」

リンディ：「魁君に黙っていて欲しいって言われていたのよ」

リンディはフェイトにそう言った

リンディ：「所で、魁君に話したいことがあるんだけど、いいかしら?」

魁：「構いませんよ、どうぞ」

魁はリンディをソファアに座らせた

魁：「それで、話とは?」

リンディ：「実は、ミッドで新設される部隊があるんだけど、その部隊を手伝って貰えないかしら」

魁：「部隊ですか? 因みにどんな?」

リンディ：「陸戦魔道師が主体で特定遺失物の保守管理が主な任

務よ
」

魁：「因みに、どういったメンバーなんですか？」

リンディ：「これが、部隊表よ」

リンディがメンバーの書かれた書類を魁に見せた

魁：「……隊長陣のランクがニアSからS+って、どんな裏ワザを使ったらこうなるんだ？」

魁はそのメンバー表を見て思った

リンディ：「それで、どうかしら？」

リンディは魁に聞いた

魁：「……………いいでしょう。リインを八神に会わせてやりたいですし」

リンディ：「ありがとう。それと、民間協力者だから、魁君にはリミッターがつかないから」

魁：「そりゃ、助かります。リミッター何て、無駄以外の何でもありませんからね」

リンディ：「そうよね。それじゃあ、そろそろ帰りましょうか、フェイト」

フェイト：「う、うん」

フェイトの顔は少し残念そうだった

リンディ：「……………それとも、フェイト。魁君のうちに泊まっ
ていく？」

フェイト：「っえ!？」

リンディ：「実は、着替えも持ってきているのよ」

リンディはフェイトの着替えが入ったバックを取り出した

フェイト：「で、でも」

リオ：「私、お姉ちゃんと一緒に寝たい」

リオがそう言った。フェイトは最初断ったが、リオが駄駄こね、
止まることになった。その時にリンディの顔はものすごく言い顔だ
つたらしい 魁談

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541z/>

魔法少女リリカルなのは ~蒼天の剣~

2011年12月2日01時51分発行